

今月のテーマ

答えの出ない現実の中で働くということ

先日、『ナースコール』という映画を観ました。舞台は病院ですが、「医療の現場だけではないんだろうな」と感じました。何が正解だったのかわからない。ベストを尽くしたのにうまくいかない。感情を整理する前に、次の仕事が終わってくる。そんな場面に、私たちは誰もが出会うからです。

答えを出せない状況に、耐える力

映画を通じて改めて考えさせられたのが、「ネガティブ・ケイパビリティ」という考え方でした。聞き慣れない言葉かと思いますが、意味はシンプルです。すぐに答えを出せない状況や、不確実な状態に耐える力のことです。ここでは「抱え続ける力」と呼んでみます。

私たちは問題が起きると、原因を探したい、正解を見つけたい、早く解決したい、と思います。それはとても自然なことです。けれど現実には、「正解がない問題」のほうが圧倒的に多い。もともとは詩人キーツが、答えの出ない宙ぶらりんの状態に踏みとどまる資質として挙げた言葉で、いま医療や教育、福祉など人と深く関わる現場で見直されています。わからなさをわからないまま抱えていられること。それ自体が、ひとつの成熟なのかもしれません。

現場では、答えの出ない問題ばかり起こる

映画の主人公は、誠実で有能な看護師です。それでも次々に起こる出来事の中で、何を優先すべきだったのか、あの判断は正しかったのか、もっと別の方法があったのではないかと、という葛藤に直面します。そして、その答えは最後まで明確には示されません。

観ているこちらもちまた、「自分ならどうしただろう」と考え続けることになります。すっきりした答えが与えられないまま、問いだけが残る。その居心地の悪さこそが、現場のリアルそのものだと感じました。

現実の仕事に、教科書のような模範解答は用意されていません。限られた時間と情報の中で、いくつもの正しさがぶつかり、どれを選んでも何かを手放すことになる。判断の後に残る「これでよかったのか」という引っかかりは、不真面目さの証ではなく、誠実に向き合った人にこそ訪れるものだと思います。

それは、私たちの仕事も同じ

これは看護の現場だけの話ではありません。経営者も、管理職も、人事担当者も同じです。部下への指導は厳しすぎなかったか。あの採用判断は正しかったのか。あの退職は防げたのか。あの制度変更は本当に良かったのか。後から振り返っても、答えが出ないことばかりです。

それでも私たちは、その時々で判断しなければなりません。答えが出ないからといって、立ち止まり続けることはできない。ここに、働くことの難しさと、意義があるように思います。とりわけ人をまとめる立場の人は、自分の判断が誰かの人生に影響することを知っています。だからこそ迷う。迷えるということは、責任を引き受けている証でもあります。

まずは**無料**セミナー等から試してみませんか。下記QRコードの特典付きアンケートよりご連絡ください

組織の成長フェーズに合わせた、実効性のある人事制度構築をご支援します。



採用、定着、育成等組織について
お悩みの企業の皆さま



社会保険労務士法人ウィズロム

「答えを出す力」より「抱え続ける力」

現代は、問題解決能力が重視される時代です。素早く原因を見つけ、最短で答えを出す。もちろん、それはとても大切な力です。

ただ、仕事の本質は「すべてを解決すること」ではなく、「解決できない問題と伴走すること」なのかもしれない、映画を見ながらそう思いました。答えを出す力と同じくらい、答えが出ないものを抱え続ける力が、働く人を支えているのではないかと感じます。

抱え続ける力とは、迷いを抱えたまま、それでも前に進む力です。タスクに完了チェックを入れることは気持ちよくありませんか。終わらないまま手元に置いておくのは、気持ちを疲弊させます。だから人はつい、早すぎる結論に飛びついたり、誰かのせいにして気持ちを片づけたりします。その誘惑にあらがって、その問題と向き合い続けること、それが抱え続ける力です。

その力が、管理職と対人支援の現場を守る

この力は、とりわけ人と向き合う仕事で重みを増します。人手不足の中で板挟みになる管理職。感情を整える間もなく次の対応に追われる対人支援の現場。こうした場所では、「正解を出せない自分」を責めてしまいがちです。

でも、答えが出ないのは能力不足のせいではなく、もともと答えのない問題だから、ということも少なくありません。「すぐに解決できないこと」を抱えたままにいられる。それ自体が、立派な力です。この見方は、自分を責めすぎる人を守り、燃え尽きを防ぐ支えになります。

組織としてできることもあります。すべてをすぐに解決できなくて当たり前だ、という前提を上司が言葉にする。迷いを安心して口にできる場をつくる。それだけで、現場の人の肩の力は少し抜けます。抱え続ける力は、それを許す職場の空気によっても育つものです。

迷いを抱えたまま、それでも前へ

映画の主人公は、勤務を終えても答えを見つけたわけではありません。葛藤は残ったままです。それでも翌日になれば、再び現場に立つのでしょう。その姿に、私はある種の強さを感じました。

私たちも同じかなと感じます。正解がわからないまま判断し、迷いが消えないまま行動し、納得できない出来事を抱えながら働いています。人を支える立場であればなおさら、割り切れないものを抱えて歩く時間のほうが長いのかもかもしれません。

答えが出ないことは、失敗ではありません。すぐに白黒つけないからこそ、見落としていた事情に気づき、別の道が見えることもあります。答えの出ない問いと一緒に居続けられる人がいる職場は、長い目で見て強いのだと思います。

最後に一言

この映画を鑑賞したのは、その上映時間にたまたま時間が空いたからでした。はじめはサスペンス映画だと思っていました。結果、病欠で一人足りない病棟の夜勤8時間をただただプロとして働く看護師さんを追ったドキュメンタリーのような映画でした。わたしも両親が病院で最後までお世話になったひとりです。看護師さんの頼もしさやいつもと変わらない所作に救われる場面はいくつもありました。医療などの現場でがんばっておられる方へあらためて敬意と感謝の気持ちでいっぱいになりました。主演の方はプロの看護師にしか見えません、そしてラスト泣けます、よかったらぜひ観てください。

(文責：特定社会保険労務士・組織心理士／岡本芳幸)

